



大野先生追悼文（大野道邦先生を偲ぶ）

三上，剛史

(Citation)

社会学雑誌, 34:228-229

(Issue Date)

2018-07-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011718>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011718>



大野先生追悼文

三 上 剛 史

追手門学院大学教授

大野先生がお亡くなりになったことは、私の人生において最も悲しい出来事の一つであった。ご家族からお知らせを受けた電話口でも、通夜の席でも、また後日、日本社会学会で追悼の言葉を述べた時にも、涙をこらえることができなかった。その言いような悲しさは、どこから来るものだったのだろうか。

私の大学人としての人生の大部分は大野先生と共にあったと言っても過言ではない。ややもすると独りで自分だけの世界で研究しようとする私にとって、学会や研究会、その他の学問的集まりへと誘って下さる大

野先生の存在は、とてもありがたい存在だった。

初めてお会いしたのは、三〇年ほど前である。関西社会学会大会のうちに、神戸大学への赴任についてのお話があつて、待ち合わせてお目にかかった。以来、大野先生は「君子の交わりは淡きこと水の如し」、関わりは持つがベタベタはしないという、毅然とした礼節とでも表現すべきものを体現されていた(ときには、とてもお茶目であつたりもするのですが)。それは誰に対してもそうであり、後輩に対しても、いつも敬語で話しかけられていた。

大野先生に自分の存在を知っていただくのに、特別のきっかけや縁があつた訳ではない。私はデュルケーム研究者でも神戸大卒業生でもなかった。異動された居安先生の後任として、適当な人材を見つけるために社会学の専門誌に寄稿している若手研究者の論文を幾つも読んだ結果だということであつた。いかにも先生らしいやり方である。

ご自分が指導する院生にも、学説研究をしようと思うのなら、対象となる社会学者の業績をくまなく読破することから始めねばならないとおっしゃっていた。この、学問に対する厳しさと真摯な姿勢は、私などにはなかなか真似のできないものであつたが、日常的に先生と接する中で、こうした職業倫理のようなものを学ばせていただいた。まことに大野先生なしには、自分の大学教員生活はもっと中途半端なものになつていたのではないかと思う。

自分が無事に神戸大学での勤めを終え、学会でも、大野先生が手掛けられたお仕事の後を引き継がせたいだけでなく、できたのは、さまざまな形で、しかしあからさまではない、先生のお導きがあったからである。お亡くなりになって二年以上が経った今も、そのことを強く感じる。

大野道邦先生の思い出

白鳥 義彦

神戸大学大学院人文学研究科教授

大野道邦先生は、二〇一五年六月二日に七三歳で亡くなりました。

先生は、二〇〇〇年に神戸大学から奈良女子大学に移られ、私はその後任として二〇〇一年に神戸大学に着任しました。それまでは、東京の大学院にいたことや、パリに留学していたことなどもあって、それほど接点があったわけではなかったのですが、以後、そうしたつながりもあって、折にふれて気にかけてくださっていたように感じています。

二〇〇〇年九月に大野先生らの呼びかけによって第一回研究会が開催された、「デュルケム／デュルケム学派研究会」は、先生に定期

的にお目にかかれる機会でした。大野先生は当初は世話人の一人として、そして二〇〇五年五月からは新たに設けられた会長として、この研究会の中心的な役割を担われました。同会は、毎年春と秋に定例の研究会を開催しながら現在に至っており、その開催数はこれまでに三六回を数えています。またこの研究会は、二〇一五年度からは科学研究費補助金も得るなどしています。とりわけ、多くの若い研究者の方が次々と新たに加わって、活発な研究が進められているという点は特筆すべきことであり、こうした分け隔てのない研究会の雰囲気は、出発点において